

本稿は *Education About Asia* 2010年冬号（米国アジア学会 Association for Asian Studies 発行）に掲載された記事 “The Sister Mountain Curriculum Project Mount Rainier and Mount Fuji: A Brief Interview with Peter Conrick and Setsuro Kobayashi” を翻訳したものです。

## 姉妹山教育プロジェクト：レーニア山・富士山

### ピーター・コンリック氏・小林設郎氏へのインタビュー

聞き手：リー・テイラー

米日財団、マウンテン・インスティテュート、内務省国立公園局は共同で姉妹山教育プロジェクトを企画しました。プロジェクトを率いるのはマウンテン・インスティテュートのアルトン・バイヤー氏で、国立公園局のリー・テイラー氏とともに携わっています。このプロジェクトは、アメリカと日本の中学生・高校生に富士山とレーニア山という2つのシンボリックな存在の山について教えることをテーマとしています。2つの山は自然環境や山麓の人々の文化について学ぶよい題材となり、山の持つ価値や環境保護の重要性についても生徒に考えさせる機会をもたらすでしょう。また、2つの山の共通点や相違点に注目することで国際理解にもつながります。

2010年8月、日本の教師6名がレーニア山を訪れ、アメリカの教師らが作った授業プランについて一緒になって議論しました。2011年<sup>\*</sup>には日本にアメリカの教師を迎えてワークショップが開催されます。姉妹山授業プラン集は2011年<sup>\*</sup>に完成し、インターネットで公開される予定です。

以下は、プロジェクトに参加した日米両国の教師、ピーター・コンリック氏と小林設郎氏へのインタビューです。聞き手のリー・テイラー氏は、マウントレーニア国立公園の教育・インタープリテーション課長を務めており、これまで国立公園局職員として26年間で10か所の国立公園に勤務してきた経歴を持っています。

**リー・テイラー** 子どもたちが富士山やレーニア山について学ぶ意義は何だと考えていますか？

**ピーター・コンリック** 子どもたちにとって自然界とのつながりを持つことはとても重要なことです。山は常に人々を魅了してきました。とりわけ、この2つの山はまさに地域の象徴的な存在です。2つの山には、科学との接点だけでなく、人々の暮らしに関する興味をそそる話題もあります。レーニア山や富士山を学習することで、生徒たちは国境を越えて環境問題、社会問題、政治的な問題まで、

しっかりと理解することができるでしょう。生徒たちは、地球のどこであっても美しい場所を守っていくことの必要性について考え始めるでしょう。さらには、自分たちがアメリカ人や日本人といった枠を超えて一緒になってこれらの美しい場所を大切に守っていかねばならないと自覚することでしょう。

**小林設郎** 富士山やレーニア山のような象徴的な場所は、大きな印象と魅力を生徒たちに与え、学習意欲を駆り立てます。2つの山はそれぞれの国／州を象徴する存在であり、また、その美しさと豊かな自然は人々に強い

---

<sup>\*</sup> 原文の記事が掲載された後、東日本大震災の影響により、計画が1年延期されました。

印象を与えます。また、2つの山は経済的な影響力や文化的な影響力も持っています。教師は理科、地理・歴史、文化・伝統、環境保護などについて教えるために、さまざまな教材や情報を必要としますが、このワークショップはそれらを提供してくれるものでした。学校はこうした分野についての知識と経験を持っている専門家を必要としていますが、2つの山は豊富な題材と野外経験のある専門家を有しています。

ワークショップの大きな目的の一つに、二国間での人的交流を進めるための関係の構築がありました。授業プランを作り、アイデアを共有し、授業プランを紹介しあうことは、互いに高めあい、また、両国において教師が山とのつながりを持つことを促進させる理想的な方法でした。私自身、教育システムや環境保護・保全の概念の教え方など、2つの国や山の間での相違点をいくつも発見しました。これらの相違点を生徒たちに気付かせたり、比較したりすることは、とても面白い授業になるでしょうし、生徒の知識・理解を広げるものとなるでしょう。ですから、富士山やレーニア山を題材に学ぶことはとても意義深いことだと私は確信しています。

**リー** 2つの山の自然を比較の観点で学ぶことには、どんな利点があるのでしょうか？

**ピーター** たくさんの利点があります。まず、科学的な探究心、方法、手順は世界のどこであっても当てはめることができることを生徒は理解できるでしょう。次に、それぞれの生態系はよく似たデザインであるため、山に存在する生物がそれぞれの地域へ適応していることを生徒が理解するのに適しています。また、それぞれの生態系における人間活動の影響を比較し、自然環境をより良く理解し、保全するための方策を導き出すこともできます。このような方法は環境問題を解決する際に重要となるグローバルな視点を生徒に身に付けさせるものとなるでしょう。加えて、2つの山はともに環太平洋火山帯の一部

であるという地学的な観点も扱うべきです。

比較の観点を持って山を見ることについて、私たちが気付いた良い例の一つとして、人間の尿尿による自然への影響についての着目があります。マウントレニア国立公園は、富士山のバイオ・トイレの効果をふまえて、レーニア山にもそれを導入することにしました。つまり、日本の技術を取り入れて廃棄物を減らそうとしたのです。

**小林** 2つの山は、自然科学的な資産とともに、文化的な豊かさも持ち合わせています。いずれも世界的に有名な山であり、地元の人々に愛されています。生徒たちは自然、文化、歴史といった幅広い視野で、2つの山の違いや類似点を学ぶことができます。このような学習活動を可能にするためには、教師は二国間の共通点や相違点について理解しておかねばなりません。この点からも、ワークショップは私にとってたいへん有意義なものでした。私たちの授業プランをもとに、さらに他の山も含めて比較することができれば、より一層素晴らしい教材となることでしょう。

**リー** この2つの山を題材にした学習活動は、教科の学習に取り入れることができるのでしょうか？

**ピーター** もちろんです。2つの山を学ぶうえで最も有益で効果的な方法は、学際的な教科横断型のアプローチをとることです。最近の脳科学では、最も効果的な学習法について、異なる分野間の関連付けをすることが重要であると言われています。生徒たちは様々な学問分野で考えることから多くのことを学習することができます。山を題材にして科学、文学、歴史、芸術など様々な学習活動を取り入れるのが最も良いやり方でしょう。

**小林** 教え方や教える内容には二国間で大きな違いがないことが、このワークショップで分かりました。その一方で、アメリカの教

師は生徒のやる気と「インスピレーション」を大きくすることにとっても力を入れているということも分かりました。単に知識を教えるのではなく、生徒への動機付けを大切にしています。アメリカの教師は、学習事項についての生徒の「気づき」を増やすことや、生徒にとってより魅力的な教材を開発することを、とても重視しています。こうした教育方法を成功させるためには、教師は豊富な知識を持っているとともに自信に溢れていなければなりません。教師自身が学習内容を楽しむことで、その感動を生徒たちと分かち合うことができるのです。

2010年のワークショップで学んだ授業プランのいくつかは、日本でも容易に実践することができるものです。とくに野外学習プランのいくつかは、すぐにでも取り入れることができます。アメリカの授業プラン開発の根底にある思想と情熱が理解できれば、これらの授業プランを日本でも理科や歴史、語学、野外活動などの授業で取り入れることができると思います。

なかには、読んだだけでは意義を理解しにくい授業プランもあります。これらはインターネットで公開するまでに、さらに検討する必要があります。ワークショップにおける野外体験活動や少人数に分かれての議論を経てようやく授業プランの意義が分かったものもありました。インターネット上に掲載する際には、ワークショップの様子を記録した短い映像を補助資料として添付するのが良いでしょう。こうした補助資料は、生徒の理解を助けるうえでも大きな力になるはずです。

ワークショップの終わりに、私たちは河原で車座になって手をつなぎました。リー・テイラーさんがギターを弾いてくれ、フォウン・パウアーさん(国立公園の教育専門職員)が、1週間にわたるワークショップのなかで各自が感じた「インスピレーション」について皆で語り合う場を設けました。これは私にとって非常に印象的な出来事でした。というのも、日本の教師である私には、こういうこ

とをする発想はなかったからです。

**リー** このプロジェクトに参加して、教師としてどのような成果がありましたか？

**ピーター** この姉妹山プロジェクトは素晴らしい経験でした。というのも、アウトドアとりわけ山が好きで、ハイキングや登山を楽しみ、また、長年にわたって日本の歴史や社会について教えているという、私の職業上の関心事や個人的な興味の多くを結び付けることができたからです。このプロジェクトにより、こうした自分の情熱を束ね上げ、生徒に伝えることができるようになりました。私の生徒たちに日本の生徒との接点を持たせ、共通のテーマで学ばせることができる機会に、私は胸が高鳴っています。そして、私が日本の仲間とつながることができたのと同じ方法で、生徒たちもまたつながることができるでしょう。

**小林** 参加した日本とアメリカの教師は、専門分野や教育経験は異なっていましたが、皆が同じ心と熱意を持っていました。日本とアメリカで国立公園の仕組みは異なっています。しかし、私たちは同じなのです。皆、山を愛し、自然を守り、私たちの財産を次世代に引き継いでいきたいと願っているのです。

世界中の人が自然を愛して、それを大切に守り、残していきたいと考えるならば、世界はさらに豊かな社会となるでしょう。子どもたちに最も近いところにおいて、このメッセージを伝えることができる教師として、私は2つの素晴らしい山を守り、次世代に引き継いでいくことの大切さを生徒たちに伝え続けていきたいと思っています。そのためにも参加した両国の教師と今後も連絡を取り合っていきたいと思っています。このワークショップを支えてくれた人たちの期待に応えるためにも、プロの教育者としてこれからも頑張っていきます。

(日本語訳：松本千登世・佐藤崇徳)